

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長

平成23年度病虫害発生予報第1号（4月）について

このことについて、病虫害発生予報第1号を発表したので送付します。

予報第1号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量		
		(現況)	(予想)	
		平年比	平年比	前年比
麦類	赤かび病	—	並	並
かき	フジコナカイガラムシ	—	やや少	並
イチゴ	うどんこ病	やや少	やや少	並
	ハダニ類	並	並	やや多
ナス	すすかび病	やや少	やや少	やや少
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	やや多	並
トマト	灰色かび病	並	やや少	並
キュウリ	べと病	やや少	やや少	並
	うどんこ病	やや多	並	並
野菜共通	コナジラミ類	やや少	やや少	やや少
茶	カンザワハダニ	並	並	並

* 茶の発生量(現況)は裾葉の発生量

<予想される向こう1か月の天候>

期間の前半は気温が低く、特に1週目はかなり低いでしょう。

天気は、数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の気温は低いでしょう。降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

週別の気温は、1・2週目（3月26日～4月8日）は低く、3週目以降（4月9日～4月22日）は平年並でしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	50	30	20
降水量	50	30	20
日照時間	20	30	50

(福岡管区气象台 平成23年3月25日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物】

1 麦類の赤かび病

(1) 予報の内容

発生時期：平年より遅い

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報では、降水量は平年より少なく（-）、開花期に当たる4月中～下旬の気温は平年並（±）の見込みである。

イ 農業総合試験場の調査によると、今後気温が平年並で経過した場合、出穂期は小麦、大麦ともに平年より6日程度、前年より5～8日遅く、4月13～16日頃と予想されている（平成23年3月18日付福岡県米麦大豆生育情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病菌の主要感染時期は開花期から開花期10日後頃である。この時期に曇天、降雨が続く暖かい場合（気温20℃以上）は多発する可能性が高い。

イ 小麦の防除適期は、開花期（出穂期後7～10日頃）～開花最盛期である。

適期防除を実施後、降雨が続く場合はその7～10日後に2回目の防除を行う。

ウ 二条大麦の防除適期は、穂揃期後約10日頃（出穂期後12～14日、蒴殻が抽出し始める頃）である。この時期は収穫前30日頃となるため、薬剤の選定に当たっては、収穫前規制に留意する。

エ 裸麦の防除適期は、穂揃期（出穂期後2～4日）である。適期防除を実施後、降雨が続く場合はその7～10日後に2回目の防除を行う。

オ 出穂期は、播種日、品種及び今後の気温の変動等によりほ場ごとに異なるので、ほ場をよく観察して防除が適期より遅れないように注意する。

カ 降雨の合間に薬剤防除を行う場合、液剤は散布後一旦乾けば降雨があっても薬剤の効果はある。しかし、粉剤の場合は、散布後6時間以内に降雨があった場合は薬剤の効果は低下するため、天候に留意して散布する。

キ 防除に当たっては、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守するとともに、周辺圃場への飛散防止対策を講ずる。

特に、薬剤によっては、小麦、大麦で農薬使用基準が異なる場合があるので注意する。

【果樹】

1 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の10月2半旬調査では、発生量はやや少なかった（±）。

寄生果率 1.8%（平年 5.3%、前年 1.1%）

発生ほ場率 84.6%（平年 91.8%、前年 85.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている（-）。

(3) 防除上の注意

ア 越冬幼虫の新梢への移動時期（4月下旬頃）から薬剤防除を徹底する。

イ 防除薬剤は天敵に対して悪影響が少ないIGR系殺虫剤を活用する。

【果樹・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ そうか病	少	少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 ・罹病葉は伝染源になるので除去する。
かいよう病	少	少	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・薬剤防除は発芽前・開花前の雨前予防散布が重要である。
ミカンハダニ	少	少	少	<ul style="list-style-type: none"> ・薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用は避ける。
ぶどう 黒とう病	—	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・頂芽の展葉2～3枚期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 ・罹病枝や巻きひげは除去する。
かき 炭疽病	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・新梢の伸長始めから硬化前まで感染するので、罹病枝の除去と栽培管理を徹底する。 ・薬剤防除は、天気予報の最高気温と最低気温の和が40℃以上で、降雨が予想される日の直前から開始する。
なし 黒星病	—	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・薬剤防除は、開花直前から満開20日後が最も重要な時期である。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(一)。

発病株率 0.1% (平年 0.8%、前年 1.5%)

発病果率 0% (平年 0.1%、前年 0.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(一)。

(3) 防除上の注意

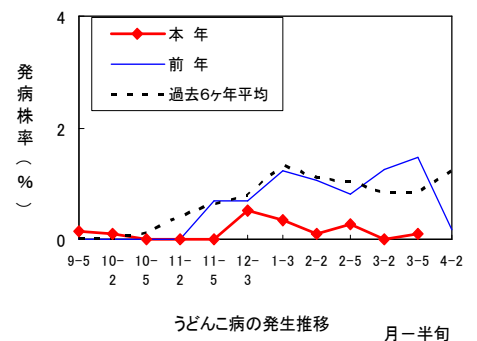
ア 罹病葉、罹病果は見つけ次第処分する。

イ 下葉かぎ後、薬剤が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。

ウ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 栽培が終了したら、罹病株は直ちにほ場外に持ち出し処分する。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 15.4% (平年 15.7%、前年 10.6%)

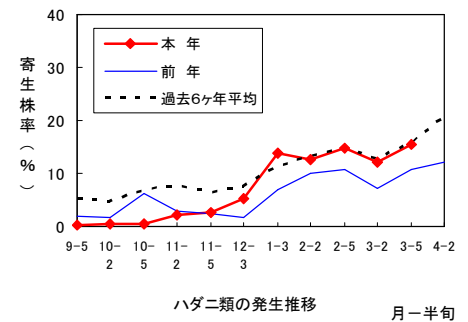
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(ー)。

(3) 防除上の注意

ア 防除は摘葉後に行い、薬剤が葉裏にも十分にかかるよう散布する。

イ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ密閉して処分する。

ウ カブリダニ類を放飼しているほ場では、天敵の影響の少ない薬剤を散布する。



ハダニ類の発生推移 月-半旬

3 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー)。

発病葉率 13.3% (平年 20.0%、前年 23.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(ー)。

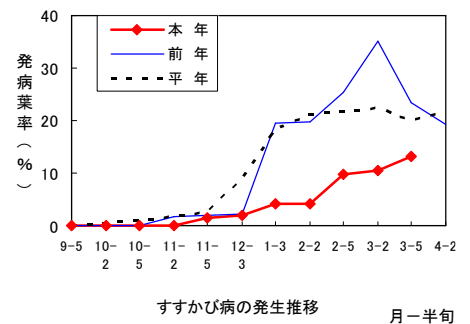
(3) 防除上の注意

ア 着果負担等で、樹勢が低下すると発生が多くなるので注意する。

イ 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。

ウ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



すすかび病の発生推移 月-半旬

4 ナスのミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

寄生葉率 10.8% (平年 5.5%、前年 13.7%)

被害果率 0.4% (平年 0.5%、前年 0.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(ー)。

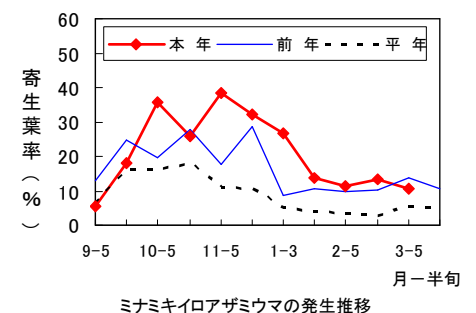
(3) 防除上の注意

ア 葉裏の寄生が多いので、薬剤が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。

多発している場合は、約1週間後に再度薬剤散布を行う。

イ ほ場内外の雑草を除去し、害虫の生息・増殖源を絶つ。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



ミナミキイロアザミウマの発生推移 月-半旬

5 トマト灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.5% (平年 0.6%、前年 0.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(ー)。

(3) 防除上の注意

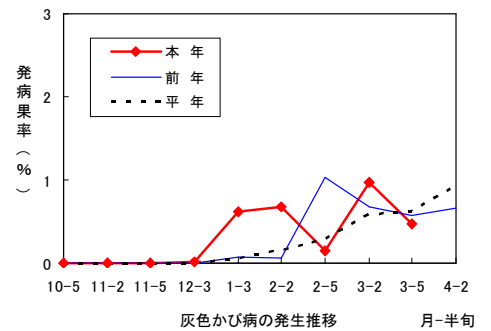
ア 罹病葉、葉先枯れ、罹病果は見つけ次第処分する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 開花後の萎れた花弁は、伝染源となるので取り除く。

エ 農薬の散布は晴天の日中に行い、十分に換気して夕方密閉するまでに、薬液が乾くようにする。

オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



6 キュウリべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー)。

発病葉率 3.3% (平年 12.0%、前年 0%)

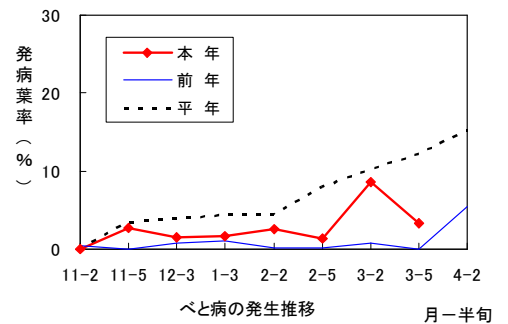
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(ー)。

(3) 防除上の注意

ア 草勢が低下すると発病が助長されるので、適正な肥培管理を行う。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



7 キュウリうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発病葉率 2.0% (平年 1.1%、前年 1.0%)

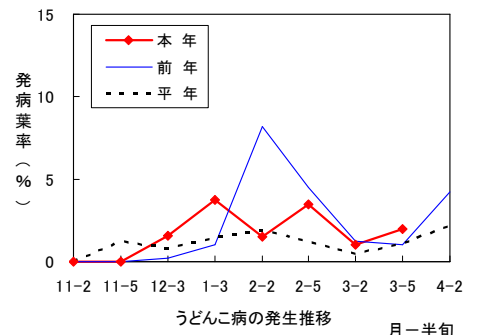
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(ー)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



8 コナジラミ類（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 3月5日半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。

ナス寄生葉率 2.6%（平年 6.6%、前年 12.2%）

トマト寄生葉率 1.6%（平年 3.1%、前年 0.3%）

キュウリ寄生葉率 0%（平年 0.9%、前年 1.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている（－）。

(3) 防除上の注意

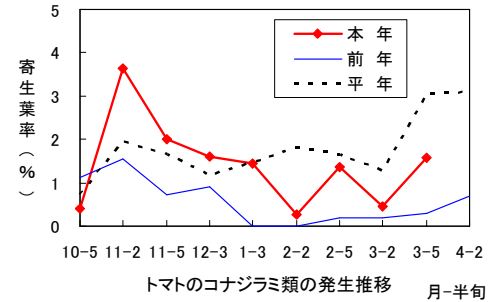
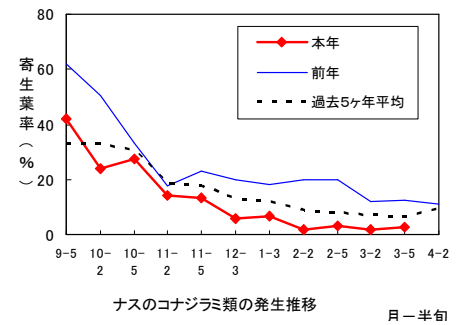
ア タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病（TYLCV）やキュウリ退緑黄化病（CCYV）の媒介虫なので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度

を下げるとともに、葉裏の寄生が多いので、薬剤は葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ ほ場内外の雑草を除去し、害虫の生息・増殖源を絶つ。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ 灰色かび病	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> 罹病果は見つけ次第除去する。 また、下葉かぎを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。 ほ場周辺の雑草の除去を徹底する。
アザミウマ類	やや多	やや多	やや多	
ナス うどんこ病 灰色かび病	やや少 やや少	やや少 やや少	やや少 やや少	<ul style="list-style-type: none"> 罹病葉や罹病果実は見つけ次第除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
トマト 葉かび病	少	少	並	
キュウリ 灰色かび病 褐斑病	やや少 やや少	やや少 やや少	やや少 やや少	<ul style="list-style-type: none"> 開花後の萎れた花卉に、灰色のかびを認めたら防除を開始する。 初期防除を徹底する。

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 2.0% (平年 2.7%、前年 3.6%)

50葉当たり虫数 1.6頭 (平年 2.5頭、前年 2.2頭)

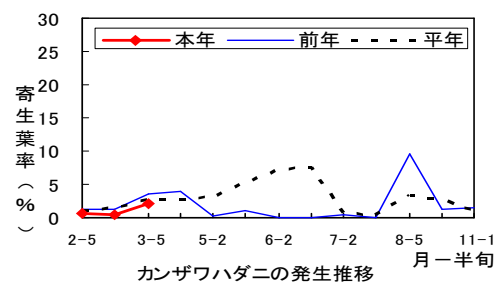
発生ほ場率 55.6% (平年 47.6%、前年 58.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア ほ場をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、農薬使用基準を遵守して防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などの※ラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

※適用作物を誤認して農薬を使用しないよう注意すること。

(例：① しゅんぎく と 食用ぎく、② トマト と ミニトマト、③ さといも と ずいき、

④ とうもろこし と ヤングコーン 等)。

2 飛散防止対策の徹底

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

**病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について
ホームページでお知らせしています。**

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jppn.ne.jp